



2020年6月22日放送

「第71回日本皮膚科学会西部支部学術大会 ①

大会を終えて」

高知大学 皮膚科
教授 佐野 栄紀

学会テーマ Real World Dermatology

令和元年9月7日、8日に、第71回日本皮膚科学会西部支部学術大会を高知市文化プラザかるぼーとで開催いたしました。故小玉肇名誉教授が平成9年に第49回を開催されて以来22年ぶりの高知大の主催となりました。このテーマは、フェイクや仮想現実が横溢する現在において、足が地についての生身の皮膚科学を再確認したい。そして来たるべきAI技術による診療革命を目前とし、われわれ皮膚科医が今一度「本当の皮膚疾患の実態・本質」を見つめ直したい、との意味です。さらに、西部支部における若い皮膚科医の活躍を見立てて「偏西風」をキーワードとして、新しい風が西から吹き日本中を席卷すると意気込みを見せたつもりです。折しも西から台風が接近してきたのは余分な符合でありました。この台風、開催には支障はなかったのですが、9月8日（日）には高知沖をすり抜け、東進し関東方面を覗いたため、関東からのご参加の多くの先生方は午後早くの便に変更されて早々に帰られたのは残念でした。ちなみに、その後この台風は千葉、東京に大雨暴風雨による大被害をもたらし、後に「令和元年房総半島台風」と命名されました。我々西部支部の皮膚科医の皆様の思いが強すぎて偏西風が台風化したのかも知れません。プログラム・抄録集の表紙には、高知の山間にある風力発電機とともに万歳している我が医局員たちを私自身がドローン撮影した写真を使いました（図1）。この巨大風車から「風」のモチーフが偶然に

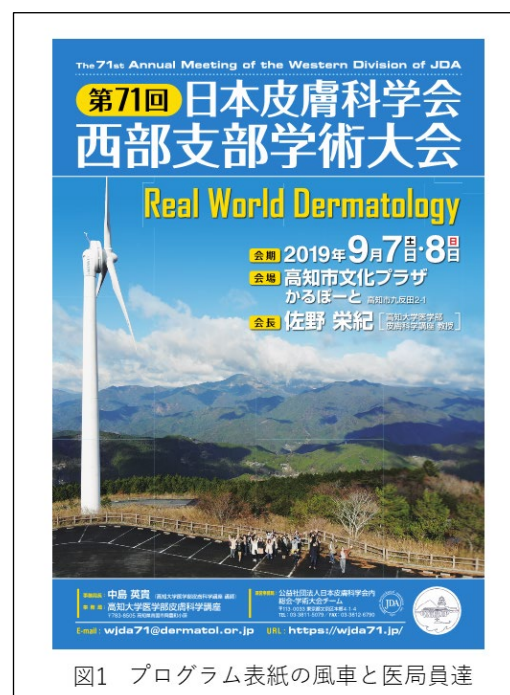


図1 プログラム表紙の風車と医局員達

も用意されていたことは、後に西部支部の若い研究皮膚科医シンポジウムに「偏西風」を銘打ったときに気づきました。いずれにせよ、台風は余計ですが。

おかげさまで 800 人の参加者で大盛会となり、全国からお集まりいただいた先生方に厚く御礼申し上げます。

プログラム

特別講演は英国の McGrath 先生による遺伝性皮膚疾患、韓国の Lee 先生による爪生物学から始まりました。続いて大阪大の岡田先生は遺伝統計学による病態解明とゲノム創薬の最新情報、2 日目の午後に高知大免疫難病センター長の仲先生による、炎症に関する LRG の発見とその意義につきお話をいただきました。いずれも学術的にハイレベルで、real world なサイエンスを実感できるものでありました。AI シンポジウムではヒューマノーム研究所の瀬々先生による、ゲノム情報を絡めたマルチオミクス解析をもとにした創薬の可能性を話され、筆者は強い衝撃を受けました。機械学習・深層学習ですべて瞬時に解決できるかも知れない。このような AI 関連のイノベーションはゲノム情報など個々の医療情報が原資であるがゆえ、人権や倫理感の欠落した中国が遙かに先んじています。逆に日本人は規則遵守し真面目すぎるため彼らに後塵を拝する危険性が高く、これを克服するためには政府主導で国力をかけた課題とすべきだと実感しました。西部支部の若手偏西風シンポジウムでは 12 人の西部若手研究者が発表され、将来が楽しみです。山元西部支部長に座長をお願いした病理シンポジウムでは、アメリカからお一人 Cha 先生にも参加いただき、計 4 人の中堅エキスパートに皮膚病理 real world を教えていただきました。

一般演題はポスター展示とあわせたプレゼンによって、じっくり見せていただけました。企業共催セミナーは 20 を数え、それぞれのテーマで最新のお話が聞けました。講演していただいた先生方には深謝申し上げます。

懇親会そして文化講演会

懇親会前の山根風仁さん、星野友紀さんのチェロとチェンバロのミニコンサートは古楽器を用いたバロックです。私と山根さんとは彼が土佐高からの知り合いで、その頃より素晴らしいチェロ弾きとして有名であり、佐渡裕ジュニアオケの第 1 チェリストをされていました。その後、東京藝大を卒業し、現在世界を目指して研鑽中です。当日は小ぶりのチェロ古楽器の澄みきった音と小さな宝石のようなチェンバロがきらきらと舞うような演奏が大変好評でした。懇親会はいつもお手伝い下さる、高知水産高校の学生さん (tuna girl=つなが〜) によるマグロ解体ショーから始まり、その後はご挨拶・乾杯と続き、そしていつものように私の友人である松山のピアニスト栗田恵子氏と東京の有名なベーシスト河上修氏のユニットによる洒落たジャズにより雰囲気盛り上がりしました。私も例によって、下手くそなピアノを披露し、かねてよりお願いしていた大阪市立大の菅原弘二先生によるテナーサキソフォーンの熱いジャムセッションが楽しかったです (図 2)。また、懇

親会会場では、ポスター賞、および西日本皮膚科雑誌賞の表彰式が行われました（図3）。懇親会がはねた2次会からは日曜日の文化講演者、門田隆将先生が東京からお見えになり、ホテル日航高知旭ロイヤルの最上階レストランバーで高知の100万ドルの夜景？を楽しみました。5年も前からアポイントを頂戴した高知県土佐高出身の門田先生は「そこまで言って委員会」などでも時々出演されていますが、いまや保守論壇の作家・批評家として、いまやネット番組、ツイッターに多大の影響力を発信されています。門田先生を囲み島田眞路先生などとも大いに話が盛り上がりました。その後、3次会に繰り出した私の行きつけのジャズバーで私はところどころ記憶が飛んでいましたが、映画「Fukushima Fifty」のクランクイン直後で、渡辺謙を吉田所長役にと原作者の門田先生が口説きおとした凄まじいエピソードには驚きました。9月8日日曜日の午前の文化講演、ペギー葉山で有名な「南国土佐を後にして」という歌の誕生秘話、それに絡めて日中戦争の折、中支に展開した高知のいわゆる鯨部隊になつた野生ヒョウ「ハチ」のエピソードなど、心温まる日本人の勇気と愛国心のお話をいただきました（図4、5）。当初60分でお願ひしたところ、最短でも90分やらせてほしい、と門田先生の言われた通り、時間が短く感じられた濃密な時間でした。ステージの上をところ狭しと移動しながら語られ、会場内は水を打ったように静まりかえり涙する人も多かったようです。



図2 ピアノを弾く佐野とサックスの菅原先生



図3 山元支部長による西日本皮膚科雑誌賞表彰式



図4 講演をされる門田先生



図5 門田先生と島田先生

おわりに

日本皮膚科学会は総会と支部総会あわせて毎年5つの学術大会が催されます。私は、学会をこんなに多く開催する必要あるのかな、金太郎飴化しているのではないのかなあ、と感じることもあったのですが、実際自分の番になると異なります。学会フォーマットで型どおりに進めるべき箇所と、独断でテーマを決め自由奔放に出来る幸せな舞台、という感覚があります。学術大会という真面目な中にも、これは受けるやろというエンターテイナー魂にも火が付きます。今回はその遊び心のひとつとして、セッションの幕間にドローン動画による高知の風景を楽しんでいただきました(図6)。高知の西の端にある幡多けんみん病院に出向中の独り医長、石元先生の手による背景音楽も効果的でした。感謝。運営にあたり、中島英貴事務局長の驚異的な事務能力、それと山田さんを初めとする日皮会学会チームのご尽力には感謝しかありません。皆様ありがとうございました(図7)。

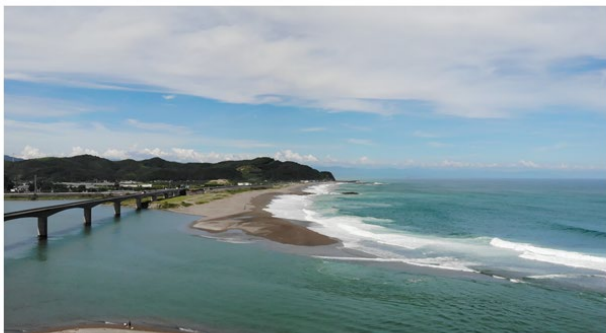


図6 ドローン撮影した仁淀川河口



図7 教室員の集合写真